

交野市埋蔵文化財調査報告1993-I

森 遺 跡

1992-6次調査報告

交野郡衙跡

1993-1次調査報告

1994.3

交野市教育委員会
財団法人 交野市文化財事業団

森 遺 跡

1992-6次調査報告

交野郡衙跡

1993-1次調査報告

交野市教育委員会
財団法人 交野市文化財事業団

はしがき

森遺跡は古墳時代の鉄器生産に関連した遺物が多数出土しています。現在交野市教育委員会では財団法人交野市文化財事業団の協力を得て、これらの整理を精力的に取り組んでおります。これまでの成果は、平成5年11月に開催いたしました「よみがえる古代交野の霸者 肩野物部氏」の特別展で、市民の皆様にご覧いただきました通りです。

また、昭和51年度以来発掘調査を行ってまいりました交野郡衙跡は、高床式倉庫と思われる建物跡なども確認されており、これらは郡衙に附属する施設とも考えられています。

「石清水田中家文書」に前交野郡司である守部広麿・広道という人物が見えます。『続日本紀』『神龜五年二月条』に「勅して正五位鍛冶造大隅に守部連の姓を賜ふ。」とあることからも、交野郡司であった守部氏は鉄器生産に深く関係していたことが分かります。今後、発掘調査を進めることにより、森・郡津地区の歴史的なつながりも解明されることと期待いたします。

つきましては、森・交野郡衙跡の調査並びに本報告書刊行にあたり、ご協力いただきました皆様方に心から感謝の意を表しますとともに、今後とも交野市文化財保護行政に一層のご理解・ご協力賜りますようお願ひいたします。

平成6年3月

交野市教育委員会

教育長 永井秀忠

例　　言

1. 本書は、平成4年9月28日から同年12月16日まで行った交野市森北1丁目378-2、379-2及び平成5年5月31日から同年6月7日まで行った交野市郡津1丁目60-5、61-1番地の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は交野市教育委員会の委託を受けて、（財）交野市文化財事業団の真鍋成史が行った。整理にあたっては、阿部誠、柏野勝重、斎藤登美子、嶋澤聰、中西貞子の諸氏に参加していただいた。
3. 本書でレベル高はすべて海拔絶対高で、方位は磁北方位である。また土色及び土器の色調は「新版標準土色帳」（農林省農林水産技術会事務局発行）によった。
4. 遺構は、アルファベット記号と2桁の数列の組合せて表記した。
アルファベット記号は、S A…竪穴式住居、S B…掘立柱建物、S D…溝、S E…井戸、S K…土坑を表している。

目　　次

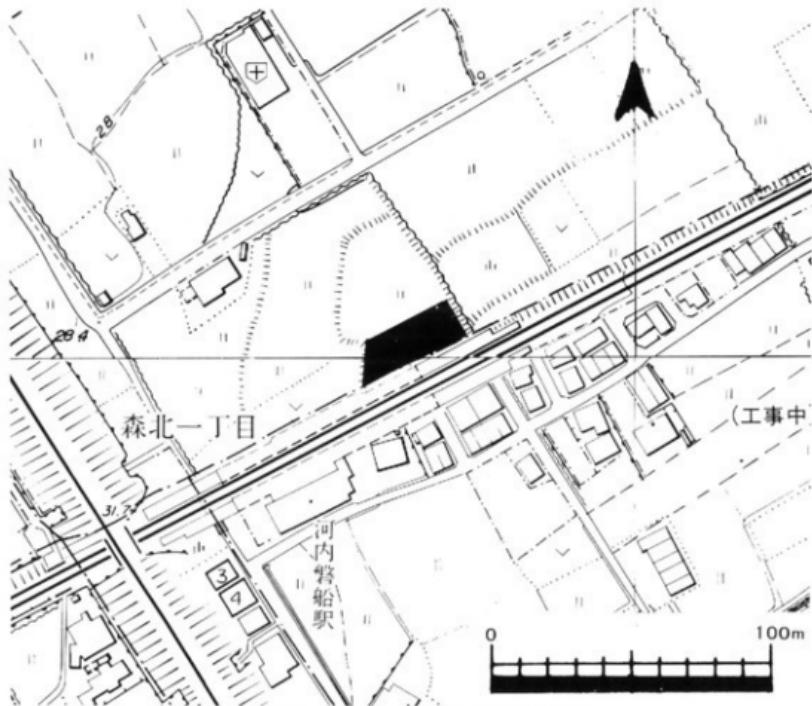
森遺跡92-6次調査	1
1. はじめに	1
2. 遺構について	2
3. 遺物について	6
4. まとめ	13
交野郡衙跡93-1次調査	14
1. はじめに	14
2. 遺構・遺物について	15
3. まとめ	16

森遺跡92－6次調査

1. はじめに

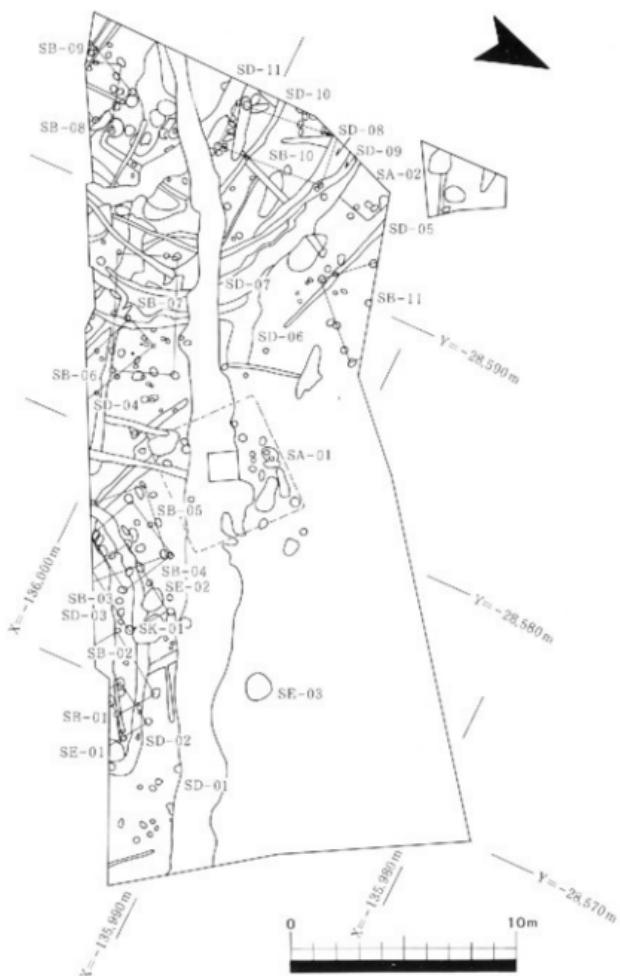
森遺跡の発掘調査は、昭和31年、現在の森南3丁目付近の町道建設に際し、弥生時代から現代に至るまでの複合遺跡であることが故片山長三氏等によって確認された。その後昭和61年から行われた都市計画道路・磐船駅前東西線建設に先立つ埋蔵文化財の確認調査の結果、遺跡は片山氏等が確認した範囲と同様に西側へ拡がっていることが認められた。

今回の調査は、平成4年9月28日から同年12月16日まで区画整理事業に先立って発掘調査を実施した。調査は38×18mの調査区を、第4層まで機械により除去の後、人力により遺構検出を行った。発掘調査は(財)交野市文化財事業団・真鍋成史が担当し、調査補助に当たっては、阿部誠、柏野勝重、鷗澤聰、代水崇、飼取純子の諸氏に御協力いただいた。



第1図 森遺跡92－6次調査区位置図

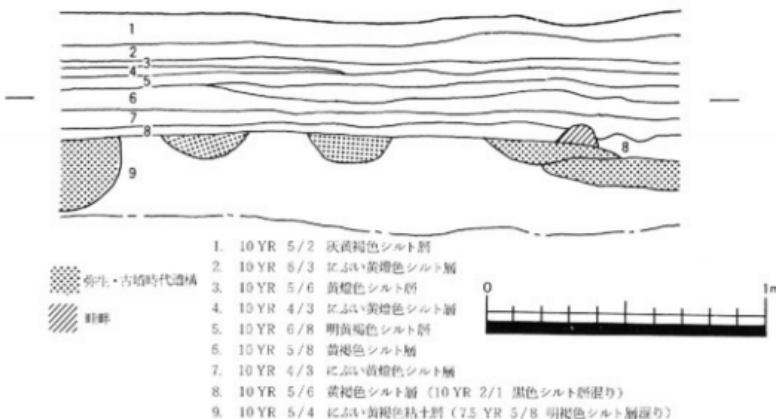
2. 遺構について



第2図 森遺跡92-6次調査区遺構配置図

(1) 基本層序

堆積層序は、森遺跡全般に見られるものであった。第9層上面で弥生時代後期～古墳時代後期にかけての遺構が掘削されている。



第3図 東西断面図

(2) 遺構

SD - 01

調査区の中央部を西から東に向かった流路である。幅は約2～3m、深さ1.0mを測る。この溝は東・西端部にてやや南側に方向を変えており、居住区の東限を示すと考えられる。溝内の堆積状況は最下層が褐灰色細砂で、それより上層では、シルト・粘土が互層堆積をなす。最下層からも須恵器の壺・提瓶が出土し、その上層からは古墳時代前期の遺物が出土地している。埋土中より鉄滓・輪羽口も出土している。



写真1 SD-01西側断面



写真2 SD-01遺物出土状況

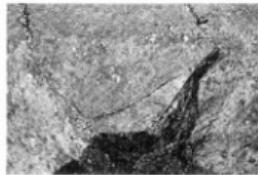


写真3 SD-02断面



写真4 SD-03断面

SD-02

調査区東側で検出した溝である。幅約0.6m、深さ約0.3mを測る。SD-01と同様で東・西端部で向きを南側に変えている。最下層部は、黒褐色粘土層で、上層はシルト層の2層からなる。古墳時代全般の遺物が出土している。

SD-03

調査区東側で検出した溝である。幅0.6~1.0m、深さ約0.2mを測る。堆積状況はオリーブ褐色シルト、黒褐色シルトが堆積した後に、再度掘削された後埋没している。古墳時代全般にわたる遺物が出土している。

SD-07・08・09

調査区西側で検出した溝である。幅はSD-07・08が約1.0m、SD-09が0.3m、深さはそれぞれ0.2mを測る。時期はSD-08→07→09という順になるだろう。古墳時代前期に属する土師器が出土している。



写真5 SD-07~09断面



写真6 SD-07~09遺物出土状況

SA-01

調査区中央部で確認した竪穴式住居である。削平をうけ住居址の外観をとどめない。柱の配置と住居隙と考えられる遺構の位置から、約5×5mの方形の竪穴式住居であろう。側溝は確認できなかった。中央部分において古墳時代前期に属する高坏・鉢が出土した。



写真7 SA-01遺物出土状況(1)



写真8 SA-01遺物出土状況(2)

S A - 02

調査区西側部で確認した竪穴式住居である。古墳時代・近世の溝によってその大半は削平を受けており、平面プランは復元できない。弥生時代後期に属する甕・鉢などが出土している。

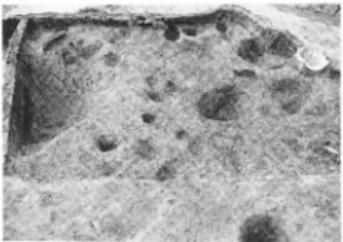


写真9 S A - 02完掘状況



写真10 S A - 02遺物出土状況

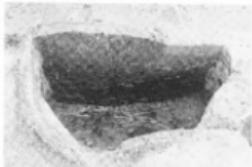


写真11 S E - 01北側断面

S E - 01

調査区東側で検出した井戸である。北側は調査区外で確認できないが、復元すれば直径 0.6m を測る円形を呈するであろう。埋土は上層が黒色シルト、下層は黒褐色シルトである。古墳時代前期の遺物が出土している。

S E - 02

調査区東部で検出した井戸である。直径約 1.0m を測る円形を呈する。埋土は上から黒褐色シルト・黒色シルト・褐灰色細砂である。古墳時代前期の遺物が出土している。

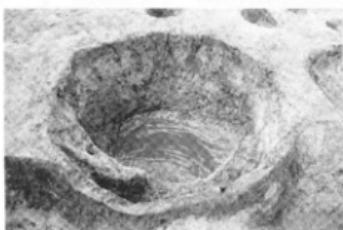


写真12 S E - 02完掘状況



写真13 S E - 02遺物出土状況

S E - 03

調査区東部で検出した井戸である。直径約 1.2m を測る円形を呈する。上層は調査以前に機械掘削により削平を受けている。須恵器の甕、壺が出土している。他の井戸は古墳時代前期の遺物を中心としているが、本井戸のみ古墳時代後期に属する。



写真14 S E - 03遺物出土状況

S B -01～12 調査区全域にて確認した掘立柱建物である。遺構の重複から見て3回の建て替えが確認できる。S D -01との重複が認められないことからも古墳時代中期から後期にかけての建物群と認識したい。

3. 遺物について

今回の調査区からは、弥生式土器・土師器・須恵器・鉄滓・繭羽口・砾石等が出土したので、遺構ごとに順番に解説する。

(1) 弥生式土器・土師器（第4図、写真15・16）

甕（1）は口縁部を欠損する。体部最大径13.8cm、底径 4.0cm、残存器高12.1cmを測る。体部最大径を1/2下位に求める。底部は平底。マキアゲ成形で、外面にタタキ、内面にケズリ痕が認められた。S D -02出土。

鉢（2）は口縁部を欠損する。体部最大径12.3cm、底径 4.2cm、残存器高 8.2cmを測る。底部は平底。マキアゲ成形で、外面に黒斑を有する。S D -03出土。

甕（3）は口径15.2cm、頸部径11.3cm、残存器高10.8cmを測る。マキアゲ成形。外面にタタキ痕が認められる。S D -06出土。

甕（4）は口径15.0cm、頸部径11.8cm、残存器高10.7cmを測る。口頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は外側に平坦面を有する。マキアゲ成形で、調整は剥落不明。外面に煤の付着が認められる。S D -06出土。

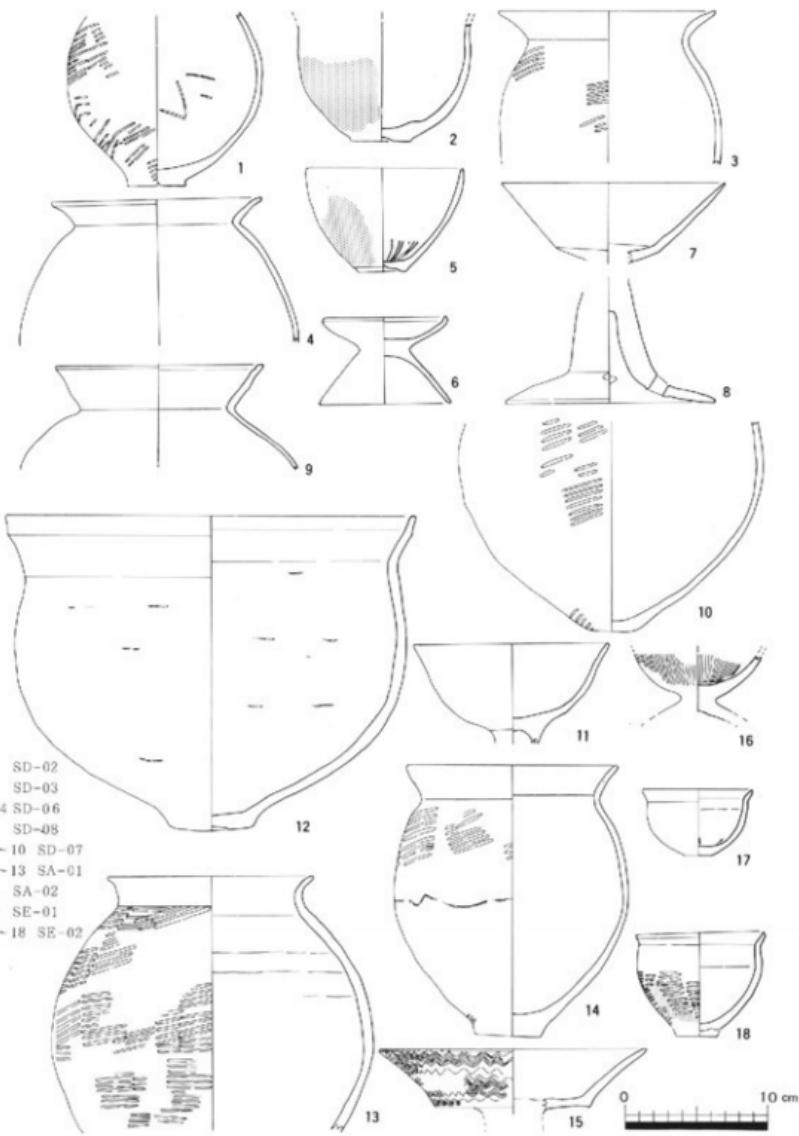
鉢（5）は口径11.0cm、底径 3.3cm、器高 7.3cmを測る。底部は平底。口縁端部を丸くおさめる。調整は剥落不明。内面に絞り痕が認められる。外面に黒斑を有する。S D -08出土。

器台（6）は復元口径 8.2cm、基部径 3.6cm、復元底径 9.4cm、器高 6.2cmを測る。坏部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部をつまみ上げて製作されている。基部はくの字状に屈曲する。マキアゲ・分割成形。調整は剥落不明。坏底部に長径 1.8cm、短径 1.6cmの粘土を充填した痕跡が認められる。S D -07出土。

高坏（7）は、坏部のみで脚部は欠損する。復元口径15.7cm、残存器高 5.7cmを測る。坏部は直線的に上外方にのび、端部はやや鋭い。調整は剥落不明。S D -07出土。

高坏（8）は坏部が欠落している。底径14.8cm、残存器高 9.2cmを測る。穿孔を4ヶ所に持つ。調整は剥落不明。S D -07出土。

甕（9）は口縁部と体部の一部である。復元口径14.2cm、頸部径10.4cm、残存器高 7.3cmを測る。口頸部は内湾気味に上外方に延び、端部はやや内側に肥厚する。調整は外面は剥落不明。内面は口縁部ヨコナデ、体部はヘラ削りの後ナデを施す。S D -07出土。



第4図 弥生式土器・土師器実測図

壺（10）は体部のみで、口縁部を欠損する。復元体部最大径21.6cm、底径 2.8cm、残存器高14.8cmを測る。底部は平底。調整は外内面とも剥落不明。いわゆる庄内壺として認識できるのではないだろうか。S D -07出土。

高坏（11）は坏部のみで、脚部を欠損する。口径14.0cm、残存器高 7.3cmを測る。坏部は内湾しながら立ち上がり、上部で外湾し、口縁端部を丸くおさめている。マキアゲ成形で、内面にハケ調整の痕跡が認められた。外面の調整は剥落不明。S A -01出土。

鉢（12）は大型で、口径29.0cm、頸部径26.4cm、体部最大径28.0cm、器高22.4cmを測る。頸部は緩やかな屈曲で、端部は丸くおさめている。底部は平底である。マキアゲ成形で、調整は剥落不明。S A -01出土。

壺（13）は口径14.5cm、頸部径13.0cm、復元体部最大径22.8cm、残存器高18.0cmを測る。口縁部は外湾しながら上外方にのび、端部は丸い。頸部は緩やかにくの字に屈曲する。マキアゲ成形。外面にタタキ痕、内面に粘土紐痕が認められた。S A -01出土。

壺（14）は復元口径14.6cm、復元頸部径12.4cm、復元体部最大径16.8cm、底径 4.4cm、器高19.2cmを測る。頸部はくの字に屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。体部最大径を1／2上位に求める。底部は平底である。マキアゲ成形で、外面にタタキ痕が認められる。S A -02出土。

壺（15）は頸部及び体部を欠損している。復元口径18.8cm、残存器高 4.6cmを測る。外面に3条の波状文を有する。調整は剥落不明。S E -01出土。

器台（16）は口縁部・脚部を欠損する。基部径 2.5cm、残存器高 4.2cmを測る。坏部は内湾気味に上外方にのび、内外面にミガキ痕が認められた。S E -02出土。

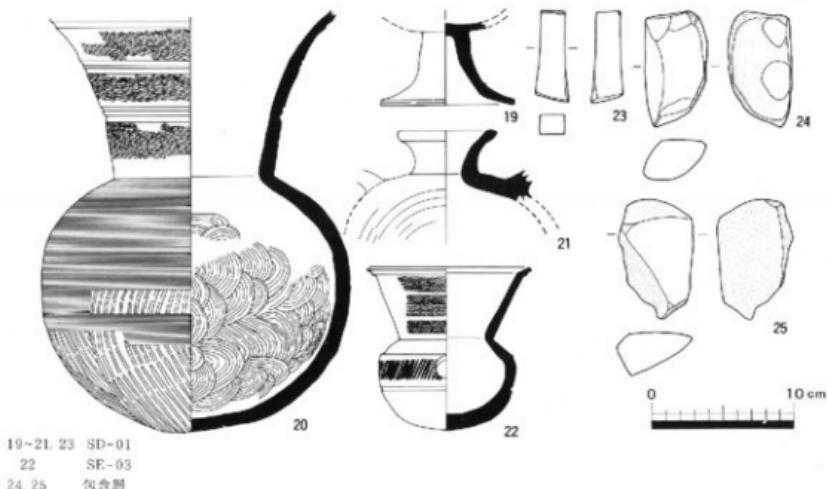
壺（17）は復元口径 7.8cm、頸部径 7.0cm、底径 1.9cm、器高 4.7cmを測る。口縁部をつまみ上げて製作されている。底部は平底、マキアゲ成形。外面に黒斑が認められる。S E -02出土。

壺（18）は口径 9.0cm、頸部径 8.7cm、体部最大径 8.9cm、残存器高 7.0cmを測る。口縁部はつまみ上げて製作されている。端部はやや鋭角気味である。底部は欠損しているが、平底と考えられる。体部最大径を1／2上位に求める。マキアゲ成形で、外面にタタキ痕、黒斑が認められる。S E -02出土。

（2） 須恵器・砥石（第5図、写真17）

高坏（19）は脚部のみで、坏部を欠損する。底径 9.4cm、残存器高 5.7cmを測る。脚部は下方に下った後、緩やかに下外方に開く。脚端部は緩やかな凹面をなす。マキアゲ・ミズビキ成形。外内面ともロクロによるナデ調整が認められた。S D -01出土。

壺（20）は口縁部の大部分を欠損している。頸部径11.4cm、体部最大径22.0cm、残存器



第5図 須恵器・砥石実測図

高29.9cmを測る。外面は口縁部に波状文、体部はタタキの後カキメ調整を行っている。内面は同心円タタキ痕が認められた。SD-01出土。

提瓶（21）は体部のほとんどを欠損している。口径 6.9cm、残存器高 5.0cmを測る。体部にカキメ痕が認められる。SD-01出土。

聴（22）は口径10.8cm、頸部径 6.0cm、体部最大径 9.6cm、器高11.2cmを測る。口頸部に4帯の波状文、体部に径 1.7cmの円孔スカシ、刺突文を有する。マキアゲ・ミズビキ成形。内面底部に自然軸の付着が認められる。SE-03出土。

砥石（23）は泥岩製で、長さ 6.4cm、幅 1.9cm、厚さ 1.4cm、重量45gを測る。使用面は4面で、石材の粒子は細粒で、灰白色を呈する。仕上砥に使用されたものであろう。SD-01出土。

砥石（24）は砂岩製で、長さ 8.2cm、幅 4.2cm、厚さ 2.8cm、重量 145gを測る。使用面は10面あり、砥石を手に持って使用したのではなかろうか。石材の粒子は中粒で、中砥に使用したものであろう。包含層出土。

砥石（25）は砂岩製で、長さ 8.5cm、幅 5.5cm、厚さ 3.1cm、重量 120gを測る。使用面は1面である。石材の粒子は中粒で、中砥に使用したものであろう。包含層出土。

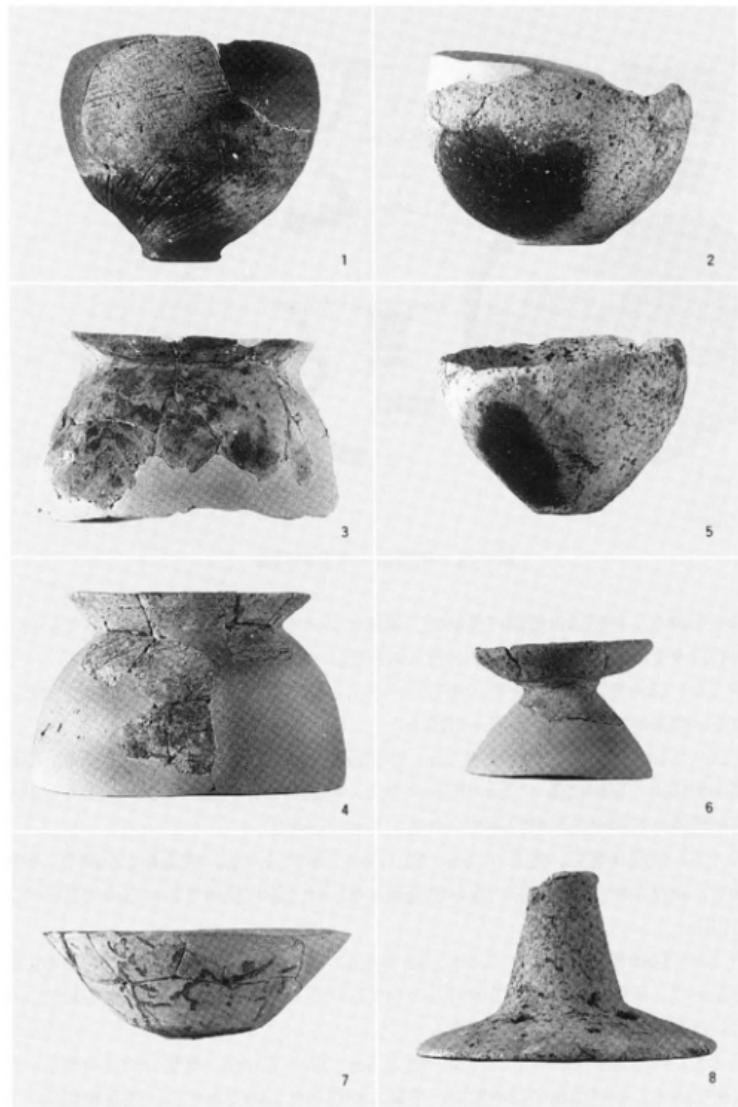


写真15 弥生式土器・土師器(1)

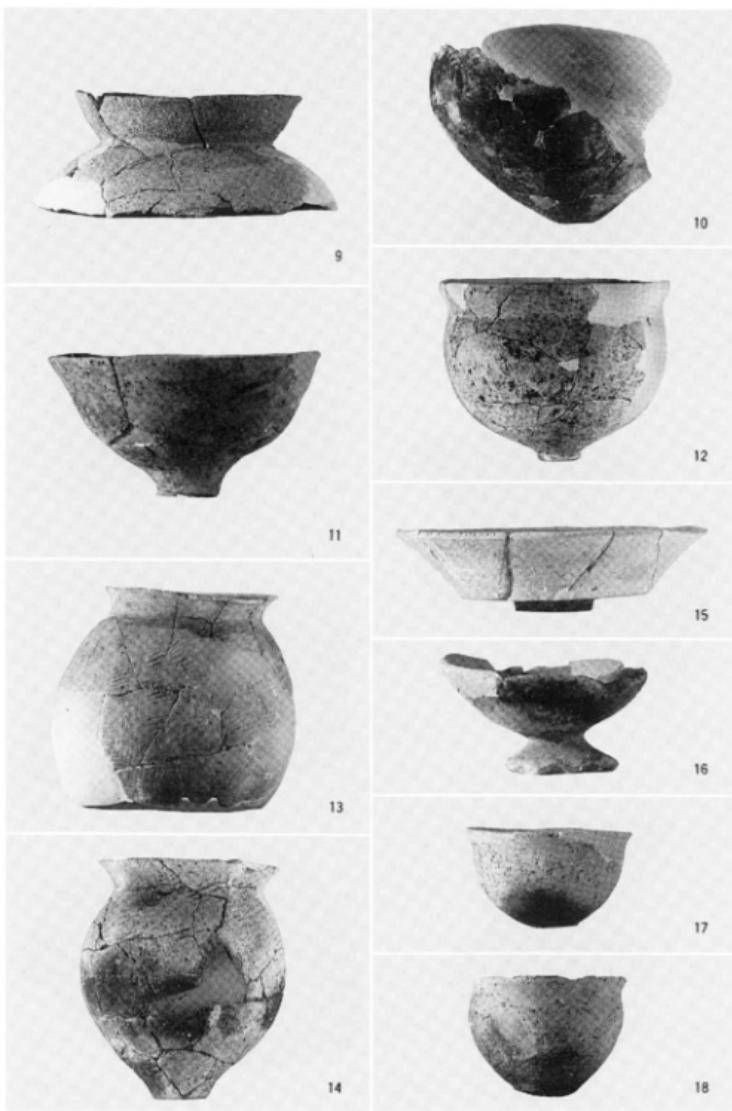


写真16 弥生式土器・土師器(2)



20



19



21



23



24



22



25

写真17 須恵器・砥石

4. まとめ

今回の調査の結果、竪穴式住居2棟、掘立柱建物11棟、井戸3基等の遺構が確認できた。平成元年度に行った本調査区のJ R河内磐船駅を挟んで南側にある森南1丁目 390-1番地の発掘調査の結果、鍛冶関連の遺構・遺物が多数確認されたにも係わらず、鍛冶作業を行った工人の住居に伴うと考えられる遺構が僅少であった。今回の調査で、彼らの住居と思われる掘立柱建物が多数検出された。また、住居の形態が遺構の切り合いから竪穴式住居→掘立柱建物に、古墳時代後期前半を境に変遷したことが確認できた。



写真18 92-6次調査区完掘状況

交野郡衙跡93－1次調査

1. はじめに

昭和51年度に交野市教育委員会が行った交野市郡津1丁目に所在する郡津神社の発掘調査で忍冬唐草文軒丸瓦が出土した。また同年奥野平次氏（現交野市文化財保護委員）が郡津小学校付近で単弁八葉蓮華文軒丸瓦を探取した。

平尾平吾氏は、『北河内史蹟史話』で「尚郡津は古、郡門とかき、門の草体『つ』から津の漢字を宛てたといはれて居る。郡津の地は、友呂岐の郡が、旧茨田郡の郡衙の所在地と思はれる如く、郡津も旧交野の郡衙のあつたところであるまいか、位置からいつても、交通からいつても、そんなに思はれる。」と郡津に交野郡衙を推定している。昭和51年度出土の軒丸瓦は平尾氏の推定を裏付けするにたる発見であった。

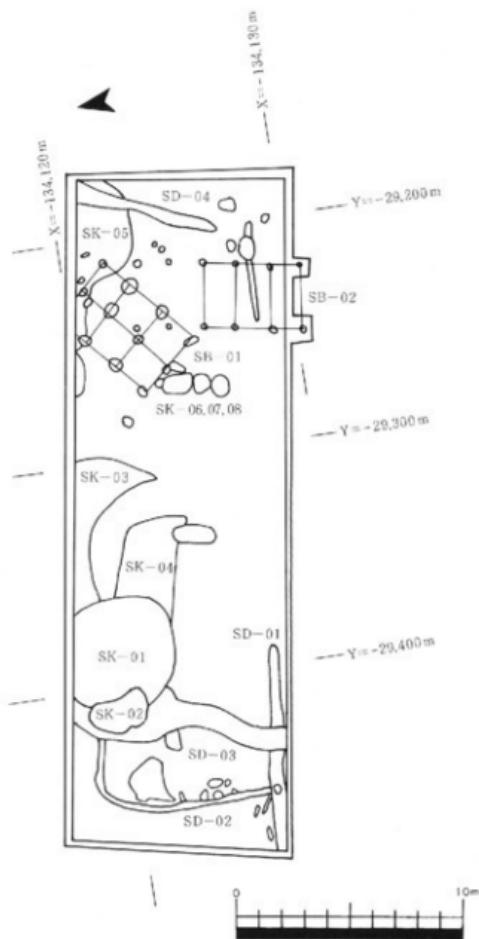
本年度の第1次調査は（財）交野市文化財事業団の調査員真鍋成史が交野市教育委員会から委託を受け、平成5年5月31日から同年6月7日まで交野市郡津1丁目60-5, 61-1番地でマンション建設に先立って行った。調査は30×10mの調査区を、第2層まで機械により除去の後、人力により遺構検出を行った。

また、第1次調査区の南側に接する郡津1丁目60-1番地でも1993年9月2日発掘調査を行っている。



第6図 交野郡衙93-1次調査区位置図

2. 遺構・遺物について



第7図 文野郡衙93-1次調査区遺構配置図

S K - 01



調査区の中央部北側に位置する土坑である。直径 5m、最深部約 0.8m を測る。北側端は調査区外で、確認できなかった。出土遺物は瓦・瓦質甕が出土した。

S K - 03

調査区中央部北側に位置する土坑である。瓦、備前窯甕が出土した。

S D - 01

調査区南西隅に位置する土坑である。幅約 0.4m、深さ約 0.1m を測る。陶器、瓦質の羽釜・椀、土師質皿が出土した。

S D - 02

調査区西側に位置する土坑である。幅約 0.2m、深さ 0.1m を測る。瓦器椀が出土した。

写真16 完掘状況

S K - 06・07・08

調査区東側に位置する土坑群である。直径それぞれ 1.3、0.8、0.8m、深さ約 0.3m を測る。SK-07より瓦質甕が出土している。SB-02と関係するのではなかろうか。

S B - 01

調査区東側に位置する総柱建物である。堀形の直径約 0.7m を測り、南北 2 間、東西 3 間以上の建物である。時期は決定できないが、その堀形が直径 0.6m を測るものも含まれており、また周辺から凸面に繩タタキ・格子タタキが認められる平瓦が出土した。

S B - 02

調査区東側に位置する掘立柱建物である。堀形約 0.25m を測り、東西 1 間、南北 5 間以上である。

3.まとめ

今回の調査の結果、奈良～平安時代に遡る総柱建物と室町時代以降の掘立柱建物及び同時代の溝等が検出できた。前者は交野郡衙に関連した建物の可能性があり、出土した瓦（写真19）及び建物の詳細な検討を要する。また後者は現在の郡津の集落の成立を考える上でも参考にできる。それぞれ今後の資料の増加を期待したい。

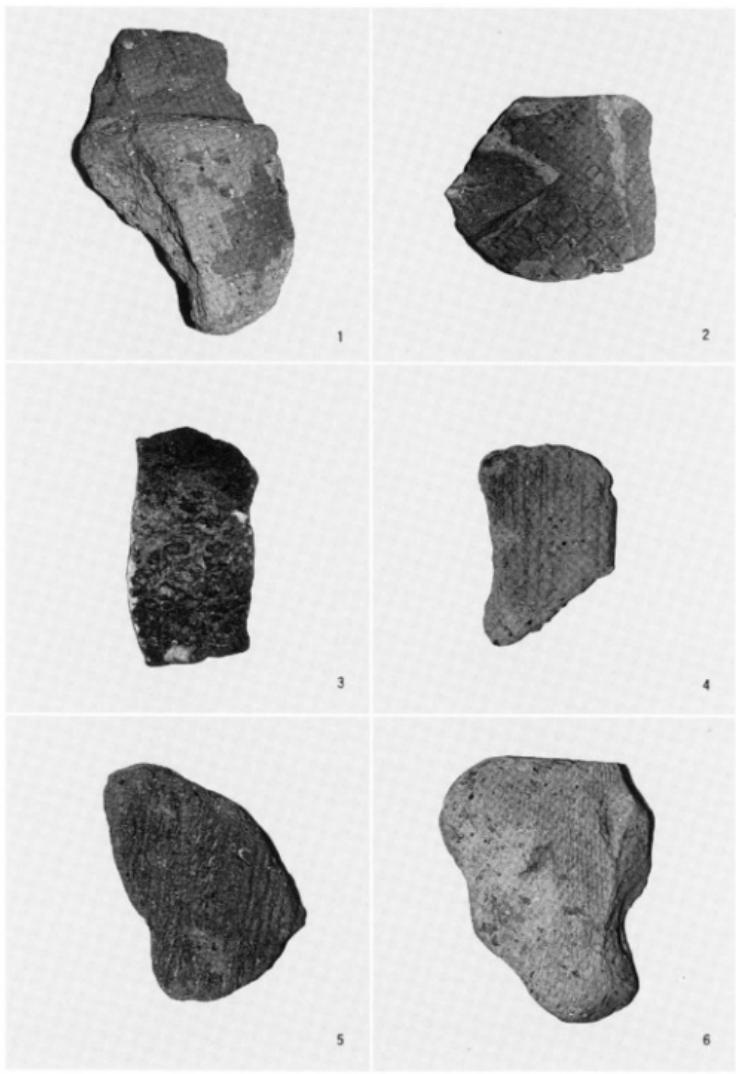


写真19 瓦

交野市埋蔵文化財調査報告 1993-I

森 遺 跡

1992-6次調査報告

交野郡衙跡

1993-1次調査報告

発行日 1994. 3

編集・発行 交野市教育委員会

助成金交野市文化財事業団

印 刷 (株)吉野
